陳舜臣さんを語る会通信

NO.72　Jun.　2022

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2022年6月10日
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

最初期のエッセイ短編・小品集『よそ者の目』

陳舜臣さんの著作の内、最初期のエッセイ、論考など、小説以外の作品を単行本発行順に並べてみました。

1965年9月　『神戸というまち』書き下ろし
1971年6月　『実録アヘン戦争』書き下ろし
1971年8月　『日本人と中国人』“初めての長編エッセイ”、書き下ろし
1972年4月　『日本的中国的』エッセイ13編、初出は新聞・雑誌ほか
1972年7月　『よそ者の目』(講談社)エッセイ54編、初出は新聞・雑誌ほか
1972年10月　『日本語と中国語』弟・謙臣氏との共著

『よそ者の目』は、江戸川乱歩賞受賞後、一気に増えた執筆依頼の隙間を縫って、新聞や雑誌に書いた短編、小品を集めたエッセイ集です。

なお、右の画像は講談社文庫版(1983)の表紙です。　(編集委員　橘雄三)

『よそ者の目』収録内容一覧(1)　■頁数は文庫版による

部	題	頁数	初　出	年	月	日
第一部	よそ者の目	19	文藝春秋	1972	2	
	同文同種こそ誤解のもと	17	諸君	1970	12	
	中国人と日本人はここが違う	16	週刊現代・増刊	1971	8	9
	巨木、二千年の根	5	サンケイ新聞　夕刊	1968	1	20
	一九二二年という年	8	世界史-学習研究社版-　月報	1971	4	
	古寺雑感	4	朝日新聞　夕刊	1967	11	8
	地震より火事	5	中国文明選　朝日新聞社版　月報	1972	5	
	ニクソン訪中偶感	5	サンケイ新聞　夕刊	1972	2	26
	日本の奥方たち	4	朝日新聞　夕刊	1968	6	17
	奇士たち	7	中国古典文学大系　平凡社版　月報	1971	8	
	孫文と神戸	4	神戸新聞	1966	3	12
	横浜中華街	12	太陽	1964	9	
	友をもとむ	3	サンケイ新聞　夕刊	1968	6	20
	登高	4	文藝春秋	1971	6	
	売文について	4	文藝春秋	1968	4	
	神戸の正月風景	2	毎日新聞　夕刊	1963	1	10
	補冬	4	読売新聞	1966	1	6、8、11
	タケノコをおもう	3	神戸新聞	1962	4	1
	夏祭雑感	3	生田神社社報　むすび	1968	8	3
	歴史舞台	4	歴史読本	1970	10	
	混血的思考	5	読売新聞　夕刊	1970	2	3

第一部■日中双方に言及しながら主に中国を描写

「巨木、二千年の根」の「巨木」は中国のこと。**「古寺雑感」**は、奈良の古寺から記述が始まるが、中国の「三武一宗(さんぶいっそう)の法難」が主題。**「日本の奥方」**では、母親の愛情が子どもにそそぎ尽されて、ダンナのほうにまわってこないという現象から、日本における、儒教最高の徳である「仁」の軽視を語る。**「神戸の正月風景」**は、神戸の正月風景に見える神戸在留中国人のお国ぶり。**「夏祭雑感」**は、生田神社の夏祭を導入に、故郷(台湾新荘)の、年中、夏祭のような風物を描く。

『よそ者の目』収録内容一覧(2)

第二部■陳さんの作品執筆にまつわるあれこれ

いくつか内容を紹介します。

「小説『阿片戦争』余話」：大佛次郎著『阿片戦争』第一部の「あとがき」からの引用で始まります。あと、中国史に登場する人物の生年を調べるのに苦労するといった話が続きます。

「小説と資料の山」：文化大革命のきっかけの一つ、『海瑞罷官(かいずいひかん)』に言及されているのが興味深い。

「四大奇書・歴史・小説」：まず、『三国演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』と歴史のかかわりを述べ、続けて、“歴史と小説”に言及。

「背景世界」：『青玉獅子香炉』をとりあげ、小説とモデルの関係を考察。

「自家製“春秋の筆法”で」：“春秋の筆法”とは、孔子が「春秋」を編纂したときの記述姿勢。陳舜臣さんは、このことと、経学者の古典解釈の仕方に言及し、推理作家はいつも自家製の春秋の筆法をもってペンをとるときのよりどころにしようとすると述べる。　(1964.8.31　毎日新聞夕刊)

怪談
陳舜臣

部	題	頁数	初　出	年	月	日
第二部	小説『阿片戦争』余話	9	中国	1968	5	
	小説と資料の山	3	毎日新聞　夕刊	1967	2	27
	四大奇書・歴史・小説	13	ブッククラブ情報	1971	4	
	背景世界	4	朝日新聞PR版	1969	8	10
	詩の秋	4	サンケイ新聞　夕刊	1969	10	16
	推理のたのしみ	3	東京新聞　夕刊	1964	8	29
	小説における歴史と推理	4	読売新聞　夕刊	1967	12	26
	自家製"春秋の筆法"で	3	東京新聞	1967	11	16
	詩と歌	5	毎日新聞　夕刊	1967	12	13
	怪談	3	毎日新聞　夕刊	1964	8	31
	推理小説私観	7	現代推理小説体系第三巻　講談社版	1972	5	
	やや逆境	4	サンケイ新聞	1971	3	12

■「よそ者の目」にみえる陳舜臣さんの立ち位置

昭和元禄(高度経済成長期の天下太平、奢侈(しゃし)安逸の時代をさした語)の時代、イザヤ・ベンダサン著『日本人とユダヤ人』(1970)を嚆矢(こうし)とし、多くの「日本とはなにか？」「日本人とは？」といった文明論が発せられた。この時期、陳舜臣さんにもこの種の執筆依頼が少なからずありました。『よそ者の目』の巻頭に置かれ、単行本の題名にもなった「よそ者の目」は文藝春秋社の依頼による執筆です。

下記文中、下線は編集委員の加筆。

外からの目。――

ベンダサンの成功に乗じて、あるいはその余勢をかって、これがもとめられた。私のように、外国人で日本語の小説をかいている人間などは、とくに『好餌(こうじ)』にされた。

気が弱く、義理にからめて、その種のエッセイの注文をすくなからず引き受けた。しまいには、『日本人と中国人』という本まで書くことになった。

日本はよそ者、異分子、夾雑物を、雑草抜きのように取り除いた土壌で、独自の花を咲かせてきたのである。それでいて、咲いた花が外からどう見えるだろうかということには、かなり神経をつかうのである。

―― あんまりきれいでないよ。

と言おうものなら、

―― よそ者は黙れ！

ということになる。

よそ者として、私はなんどもこの同じ回路のどこかに、さびしく立たされた。

これが陳舜臣さんの立ち位置なのです。

『よそ者の目』収録内容一覧(3)

第三部■第三部を括るテーマはないようです

いくつか内容を紹介します。

「狂への放火」：三島由紀夫と王国維の自死に言及。

「人間世界という港町」：みなと町神戸の特徴・性格。神戸新聞社会部長として来神した江見水蔭、コロタイプ製版の草分け光村利藻、若き日の稲垣足穂などを通して描く。

「二つの山」：高野山と六甲山。陳舜臣さんは、「海よりも山が好き」。

「琵琶湖戦国紀行」：秀吉が中心。織田信長、浅井・朝倉、柴田勝家、石田三成、於市の方ほか。

「オーローボッツェー」：「オーローボッツェー」は、陳舜臣さんを叱るときの父の一喝、台湾語。漢字を当てると烏魯木斉(ウルムチ)。戦後、陳さんが台湾へ帰省し、中学で英語を教えていたころの生徒の外祖父・楊増新にも言及。楊増新という名は、陳作品に頻出。ほか、「西域」憧憬癖のことなど。

「もののわかれ」：騎馬民族の筒袖、ズボンが世界の服装の主流となった。分かれ道のどちらに進むか、それが歴史さえ変えるという話。

「新・人間万歳」：不老長寿の仙人になるよりも、人間界で楽しく生きよう。

「幻のたばこ道」：華道、茶道、では、たばこ道(どう)は？

「むかしのメモ」：戦後、台湾帰省中の思い出。

「ヘソと道」：「ヘソ」談義、華道、茶道の「道」談義。　(1968.8.19 毎日新聞夕刊)

二つの山 高野山と六甲山
陳 舜臣

部	題	頁数	初　出	年	月	日
第三部	狂への放火	7	諸君	1971	3	
	西欧ヒューマニズムの正体	4	朝日新聞 夕刊	1968	2	28
	人間世界という港町	10	海	1971	6	
	大衆不信	2	毎日新聞 夕刊	1962	5	9
	渦のむこう	3	福島新聞	1970	3	22
	二つの山	3	毎日新聞 夕刊	1968	8	19
	神戸異人館	8	婦人画報	1972	2	
	琵琶湖戦国紀行	8	太陽	1972	2	
	オーローボッツェー	4	中央公論	1971	11	
	我流鑑賞法	3	センターNo.116	1964	9	
	もののわかれ	3	センターNo.133	1966	2	
	新・人間万歳	4	センターNo.144	1967	1	
	この世はうごく	3	センターNo.129	1965	10	
	井戸端会議の変貌	3	サンケイ新聞 夕刊	1970	10	22
	幻のたばこ道	4	センターNo.138	1966	7	
	一日30分精読法	3	不明	1968		
	旅にしあれば	4	酒	1970	6	
	ペルシャ詩人の魅惑	5	小説エース	1969	6	
	むかしのメモ	4	酒	1966	6	
	読書遍歴	4	週刊読書人	1969	8	18
	ヘソと道	4	朝日新聞PR版	1969	8	3

『よそ者の目』いくつかの補足

補足(1)■「詩の秋」に登場する黄遵憲

黄遵憲は陳舜臣さん思い入れの人物です。『巷談 中国近代英傑列伝』でも取り上げています。また、『青山一髪(『孫文』と改題)』でも出てきます。

黄遵憲■一八四八年、広東省嘉応州の客家とよばれる漢民族の一派に属する家に生まれる。二十九歳で挙人となり、間もなく駐日外交官に任命されて外国生活に入る。以後、四十七歳まで、日本、アメリカ、イギリス、シンガポールなどの地を歴任して歩き、世界情勢にふれる。戊戌政変ののち故郷に隠退。一九〇五年、郷里にて没。五十八歳。画像は、広東省梅州市にある黄遵憲故居(人境廬)、編集委員撮影。

陳舜臣さんが「詩の秋」に引用した黄遵憲の「八月十五夜太平洋舟中望月作歌」は五十六行(句)に及ぶ長い詩です。島田久美子注『中國詩人選集二集15 黄遵憲』(1963 岩波書店)から、陳さんが引用した句のみ転載します。

一輪懸空一輪轉(第23句)
幾家兒女怨別離(第31句)
幾處樓臺作歌舞(第32句)
月不同時地各別(第43句)
彼乍東升此西没(第45句)

補足(2)■中国人は商売下手か?

「同文同種こそ誤解のもと」より抜粋引用します。傍線は編集委員の加筆。

中国人が商売上手であるというのは、俗説もいいところだということを、ぜひ知ってもらわねばならない。

外国人が接触する、ごく限られた一部の人間によって、その国の国民ぜんたいを規定などされてはたまらない。中国では商業がむかしから軽んじられていたので、ごく最近まで一流の人間はそのジャンルにはいろうとしなかったほどだ。けっして商売天才の民族ではない。中国ではついに三井も三菱もつくり出せなかった。むしろ商売下手の民族と規定したほうが、現実に近いかもしれない。

陳舜臣さんは右のようにおっしゃるが、古くは商人という言葉の由来、長く世界で活躍してきた華僑、最近のBATHなど、とても、商売下手の民族とは思えない。

BATH■BATH(Baidu 百度・Alibaba 阿里巴巴・Tencent 騰訊・HUAWEI 華為)は米国のGAFA(Google・Amazon・Facebook・Apple)に迫ると言われる。

補足(3)■哲人政治家、楊増新

次は、「オーロボッツェー」に記述のある楊増新(1864~1928)という人物について補足します。

まず、『敦煌の旅』「阿修羅」の章、第一節です。

一九一〇年代から二〇年代にかけての頃です。

そのころ、新疆の省長と督軍を兼ね、民政と軍政を掌握していたのは、楊増新という人物でした。これはもう古めかしいもいいところで、典型的な旧派の政客でしたが、実力をもった独裁者だったのです。彼は清末以来、新疆に君臨すること十七年に及びました。独裁者といっても、武力を背景にしたのではありません。一種奇妙な哲人政治をおこなっていたようです。

のちにクーデターがおこり、彼は暗殺されてしまいました。

もう一つ、陳舜臣さんが戦後、台湾へ帰省し、新しくできた中学校で英語の教師をしていた頃の話です。教え子に郭懐福という生徒がいました。『道半ば』「学校事始」の章、第三節から引用します。

やがて郭懐福君の母親の身もとがわかり、私はおどろいてしまった。新疆省主席で暗殺された楊増新の娘だったのである。

このあと、楊増新についての記述が続きます。ほか、『ウルムチに消えた火』は、楊増新を中心に据えて描いた短編です。また、『笑天の昇天』にも記述があります。陳さんにとって気になる人物のようです。